



夫の章さんとは今も海デートを楽しむ。章さん曰く「(洋子さんは)結婚してからもっと美人になった」



摘みたてハーブサラダとデザートのパラのアイスクリーム。ドレッシング用のハーブビネガーもお手製。



トーシメーは八重山在来のおールドローズ。夏場は花数が少ないが、秋～春は勢いよく咲き乱れる。

食べられるもの見つけるような感じで発見していったので、お花もおいしいと知っていたから」

結婚10年目に、子どもたちの進学を見据えて、石垣島に家を建てて移住した。事務員として働きながら、家でランの栽培に熱中した。「庭がなかったから、室内でできるランの栽培を始めたんだけど、何百鉢ものランで足の踏み場もないほど。商売にしたらと言われたけど、1個売ったら2個あげるというような具合でした」

熱中するとトコトン……というタイプの洋子さんは、経理事務の仕事にも燃え、母校で簿記を学び直したりもしたという。

幸せな生活が一転したのは、98年正月元旦のこと。当時16歳だった最愛の娘・紀和さんが交通事故で亡くなったのだ。一度に4名の高校生の命を奪った大事故に、精神的ショックはあまりに大きく、「何度も死にたいと思いました。でもそのたびに私を産んだ母の声が聞こえて、命ってただごとじゃないぞと思ひ直したんです」

悲しみにくれるなかで、北海道への旅が一筋の光明につながった。「寂しくつらくなって、北へ北へと向かい、富良野のラベンダー畑を見たとき、ものすごく癒やされて、ありがたうと思っただけです」

それまで、被害者の親を訪ねて慰め合っても、飲酒運転撲滅運動の先頭に立つても癒えなかった心

の傷を、そっと癒やしてくれたのは、大好きなハーブだった。

「痛い傷を語っているだけじゃいやだ。泣きじゃくっているだけじゃ私じゃない。どうせなら元気になることをやろうと思ったのね」

## 八重山の野バラ

それからは、持ち前のトコトン精神を発揮して、ハーブの世界にのめりこんでいった。あらゆるハーブの種を取り寄せ、在来のお島のハーブを研究し、天国の娘に手紙を書くような気持ちで地元誌にエッセイを綴った。挿絵に描いた一枚の葉っぱの絵をほめられたことがきっかけで、植物画も描くようになった。葉脈やトゲまで丹念に描かれた絵からは、植物への愛情がじんわり伝わってくる。

「同じ葉っぱでも人が一人ずつ違うように違う。それが面白くて」

04年、土地を購入して、念願のハーブガーデンをオープンした。

今、洋子さんがもつとも熱心に取り組んでいるのが、八重山在来のピンクの野バラ、トーシメー(コウシンバラ)の栽培だ。



細密な植物画は、娘さんに捧げるような気持ちで描くという。

「私が北のラベンダーで癒やされたように、南へ来た人が癒やされる植物は何だろうと考えて、あれこれ試してこの花にしました」

トーシメーの咲いている場所に案内してもらった。可憐なピンクの野バラが咲き乱れる畑は、近づくと、風に乗ってふうわり甘いかな香りが優しく鼻をくすぐる。

「ステキでしょう? 秋から春までたくさん花をつけるんですよ。この花は食べられます。こややつムシヤムシヤ食べてください」

洋子さんはそう言うなり、花びらをちぎってほおばった。私もすかさず真似をする。全然、苦くない。口の中いっぱいにバラの香りが広がって、ウーン幸せ。

「よく、ハーブの薬効がどののと言うけど、私はそれは後からついてくるものだと思います。むしろ植物を通して、命の営みの大切さを知ってほしい。だから、この春から、仲間を増やすために、ハーブ教室も始めたんですよ」

この日のお手製ランチは、とりどりの摘みたてハーブをハーブドレッシングであえたサラダとバラのお茶、そしてデザートはバラのアイスクリーム。花園のように美しいサラダは、野の草のほろ苦さと、酸っぱさと、花の甘さが香り、元気がわいてくる。

苦く酸っぱく甘いこの一皿は、植物とともに歩んできた洋子さんの人生のようなサラダだった。